



10月29日に青森市で開かれた「全日本合唱コンクール全国大会」で佐賀女子高校合唱部が金賞及び文部科学大臣賞を受賞しました。これまでも金賞の受賞はありましたが、最高賞、つまり日本一の文部科学大臣賞を受賞するのは初めてのことです。佐賀県の高校合唱部としても例がなく、久方ぶりにこの栄冠を九州にもたらしてくれました。

指導下さった樋口久子先生、伊藤千尋先生、白鳥佳先生、支えて下さった保護者の皆様に心からお礼を申し上げます。

今回出場したのは27名の部員全員です。入部時に全く合唱の経験のない生徒がほとんどと聞いています。中心となった3年生は、入学直後のコンクールがコロナ禍で中止され、悔しい思いをしました。練習時は、暑い時も寒い時も感染予防のために窓は開け放っておかねばなりませんでした。飛沫を飛ばさないように全力で歌う、そのことの難しさとずっと闘ってきたと思います。

また、樋口先生は作品の世界を完成されたものにするためにワンフレーズも妥協しない厳しい指導で知られる方です。生徒たちは何度も何度も同じ個所を歌うことにも忍耐強く応え、目指す世界観を作り上げていきました。

20年前、樋口先生が同好会から昇格させて生まれた合唱部。小さな希望の種を歳月をかけて大事に育てて下さいました。その情熱には本当に頭が下がります。2005年には合唱部の卒業生による「ソレイユ」というグループが結成され、こちらはこれまで、8年連続で日本一に輝いています。全国に無数にある高校合唱部。しかも、はっきりと点数で差が出るスポーツ競技と違い、審査員の皆さんの感性はそれぞれ異なります。頂点は手が届きそうで、遠いものでした。その栄冠を、佐賀女子高校合唱部が今年、ようやく手にしたのでした。

11月2日に学校体育館で開かれた優勝報告会では、受賞曲を披露してくれました。自由曲として選んだポーランドの作曲家クシシュトフ・ペンデレツキによるミサ曲は、同じく東欧のウクライナで繰り広げられている戦争被害者への祈りが、響きあう美しいハーモニーとなって空間を満たしているように感じられました。改めて平和の尊さを思い、厳かな気持ちになりました。

3年生の友添歩部長は厳しい練習にあけくれた日々を振り返り、「深くて濃い3年間でした」と、支えてくれたクラスメートや、温かく送り出してくれた先生方に感謝の言葉を述べました。そこにはコロナ禍での厳しい練習に耐え、清々しいまでに成長した姿がありました。この経験は、きっと、彼女たちのこれからの人生を支えてくれるに違いないと思いました。

最後に、ご支援くださいました、多くの皆様に心から感謝申し上げます、ご報告と致します。